寄付のお礼

今回は、50周年の記念事業として、保護者会から前倒ししていただいていたボルダリング施設などに加えて、校務支援システムの整備を中心とした施設整備を行いました。

在校生の保護者、教職員に加えて、卒業生の皆様からいただいた寄付は、記念誌を含む周年事業の経費にもあてさせていただいています。

なお、同窓会からは本誌第９号でもお知らせしましたように記念贈呈品として演台をご寄付いただいたことも合わせてお礼申し上げます。ホールでの行事はもちろん毎週月曜日の朝会において、既にしっかり活用させていただいています。

ありがとうございました。

訃　報

Sr. 石井彌栄子
元校長

本校第５代校長のシスター石井彌栄子先生が去る６月２日に亡くなられました。

石井先生は、昭和57年度から５年間校長として、附属小学校の発展にご尽力されました。

昭和59年に私が新任の教師として本校に着任した当時、お世話になったのが石井校長先生でした。２年目にいきなり１年生の担任を命じられ、とまどっていた時には、時折教室を訪ねてきてくださり、直接ご指導いただいたこともありました。20周年の記念事業として造った総合遊具の完成式の時に、風船飛ばしをいっしょにやらせていただいたのも思い出です。優しいまなざしで、子どもたちの様子をいつも見守っておられたお姿を思い出します。

天国で安らかにお休みください。

（服部　和也）

記　念　誌

今回の記念誌は、「清心小学校の不易探訪」というテーマで、創立50周年を振り返り、未来への報告書としてまとめました。編集にあたっては、保護者、在校生に加えて卒業生の皆様にも、インタビューをさせていただき、これまで清心小学校が大切に伝えてきたものは何だったのかを「教育を受けた側」からの視点で描き出そうとしたものです。清心小学校が今後どんな学校でありたいと願っているかについて、51年目からの宣言として記した内容も、巻末にレポートしています。

この記念誌は、記念行事の当日出席された方にお渡しした後、オープンスクール等で本校教育に関心を持たれている方に配布しています。まだ、余部がありますので、必要な方は小学校までご連絡ください。

同窓会総会を開催

ノートルダム清心女子大学附属小学校 同窓会総会が開催されました

総　会

同窓の皆様益々ご清祥のことと心よりお慶び申し上げます。さて先般平成29年12月９日小学校多目的ホールにおいて、ノートルダム清心女子大学附属小学校創立50周年の機会に合わせて同窓会総会を開催いたしました。また総会開催を記念して講演会、その後懇親会が開かれましたことをご報告させて頂きます。

「記念講演」の講師にはノートルダム清心女子大学前学長 高木孝子様をお招きし、「今　問われる心の教育とは」という演題でご講演を頂きました。司会進行は楢村素子（９期生）、花束贈呈は石井尚子（１期生）、また西川智晴同窓会長が謝辞を述べられました。

引き続き「同窓会総会」が開催され、西川同窓会会長がご挨拶を述べられ、議長選出に続き、１号議案「会則変更の件」では副会長は現２名を３名に変更すること、２号議案「新役員の選任の件」、３号議案「その他」が賛成多数で承認され、新任副会長のご紹介とご挨拶もされました。

休憩の後「同窓会懇親会」が多目的教室で開催され、西川会長のご挨拶に続き、服部和也校長先生よりご挨拶を頂きました。来賓には高木孝子様、また旧職員として鳥越修様、嶽惣爾様、永原和子様、服部美佳様にご出席を賜りました。乾杯のご発声を元教頭先生の鳥越修様にお願いし、その後同窓生の近況報告や思い出話など和やかな歓談のひとときを過ごしました。今回の同窓会総会をきっかけに数年ぶりの再会や同窓会を開く予定の期もあり、お互いに清心ファミリーであることを感じられた楽しい会となりました。閉会のご挨拶は本日副会長に就任されました永山雅巳様に頂き、清心小学校同窓会の今後の発展を心より願っておられました。

学校創立50周年という大きな節目をもって、また新たな気持ちで同窓生を結ぶ会としてお役目が果たせるように努力していきたいと思います。

１期生　石　井　尚　子

新役員の紹介

ノートルダム清心女子大学附属小学校
同窓会　役員

会　　長：	西　川　智　晴（１期生）
名誉会長：	橋　本　光　司（１期生）
顧　　問：	服　部　和　也（校長先生）
副 会 長：	藤　田　淑　子（４期生）
	永　山　雅　己（10期生）
	神　野　　恵（17期生）
理　　事：	石　井　尚　子（１期生）
	児　玉　　明（２期生）
	大　橋　正　禎（４期生）
	西　川　眞記子（４期生）
	楢　村　素　子（９期生）
	真　田　恭　子（12期生）
	西　川　陽　子（34期生）

同窓会総会並びに特別講演会の報告

ノートルダム清心女子大学附属小学校同窓会50周年記念特別講演会
「今、問われている心の教育」　高木　孝子先生

記念講演会

生徒のお母さまから「娘に死にたいと言われた」という相談を受けた、そんなショッキングなお話から始まった講演でした。この問題定義に、聞いていた人達はそれぞれの胸の中で答えを模索していたのではないでしょうか。正直とても難しい問題で、即答できかねました。

「オレは、オレを大事にしてくれる人のことを、じっと考えていた。自分を大事にしてくれる人がいるのに、自分を粗末にできるはずがない。」灰谷健次郎著の『天の瞳』（角川書店1998）から引用され、丁寧にその意味をお話し下さいました。

心の発達にはくぐらなければならない３つのゲートがあります。

第一は幼児期にお母さんを主体に家族から与えられる「自分は貢献している」「愛されている」という実感が、家の中での自分の居場所を、第二に児童期には初めて集団の属することで、自分の中で「理不尽さとの折り合い」をつけながら学校での居場所を、そして第三の思春期では「私は大丈夫―という自分を信じる」ことで、自分自身の心に居場所を見つけていく、相応しい時期に正しい段階でこの３つのゲートをくぐって成長をしていくことが求められています。

この３つのゲートを正しく超えていれば、その後の会社や社会という集団のなかでも自分の居場所を作って行くことができます。この居場所というのは、物理的な場所のみではなく、心の居場所でもあり、いつでも帰れる拠り所を作っていくことができるのです。

家族という小さな集団から始まり、学校、会社、社会と徐々に大きな集団になっていっても、自分の核になる心の居場所さえあれば、その後の人生で何があっても乗り越えていけるのだと思いました。小さな子供を連れた卒業生や現職の先生方、子育てを終えた方、お話を聞いていた私達もそれぞれが色々な立場から、子供達に居心地のいい居場所を作れるようにしたいと感じた講演でした。

４期生　西　川　眞記子
本田(松原)利江